日本リメディアル教育学会 学会誌　チェック項目

【特集記事用】

2021/09/15版

本会誌に原稿を投稿する際には（「会員の本」を除く），原稿とともに本チェック項目も一緒に提出ください。

本チェック項目を元に編集委員会で査読開始の可否を判定（プレ査読）します。このチェックにより大きな不備があると判定された場合は、受け付けた原稿の査読を行わず返却することがあります。

（１）原稿のカテゴリを選び、チェック（☑）を入れて下さい。

　【　□論文　□実践研究論文　□研究ノート　□実践報告　~~□資料　□教材解説~~　】

　※チェック項目１

　原稿の評価項目（投稿規程第５条）を確認して種別を選択しましたか？　【　□Yes　□No　】

（２）著者名（所属）を書いてください（共著の場合は第一筆者のみ）。

|  |
| --- |
|  |

※チェック項目２

筆者（共著の場合，第一筆者）は当該年度の会費を支払い済みですか　【　□Yes　□No　】

（３）原稿のタイトルを書いて下さい。

|  |
| --- |
|  |

※チェック項目３

　タイトルは，取り組んだ問題，着眼点、研究対象、研究手法、研究成果等に関するキーワードを含み、論文の中身を端的に表していますか？　【　□Yes　□No　】

（４）原稿の要旨を書いて下さい（400字程度）。

|  |
| --- |
|  |

※チェック項目４

　要旨は、何について論じ（研究対象）、どのようにやるのか（研究手法）、どうしてやるのか（着眼点）、何が分かったのか（研究結果）等について、端的に書けていますか？ 【　□Yes　□No　】

　~~→【資料・教材解説】の場合は（６－Ｃ）へ。~~

（５）原稿のリサーチクエスション（何を明らかにしようとしているのか）を書いてください。本文に記載されている文章を活用して記入されることを推奨します。（200～400字程度）

|  |
| --- |
|  |

　※チェック項目５

　上のリサーチクエスションは、リメディアル教育と関係がありますか？　　【　□Yes　□No　】

　※チェック項目６

　上のリサーチクエスションは、要旨と関連づけて、明確に書けましたか？　【　□Yes　□No　】

　→【実践報告】の場合は、（６－Ｂ）へ。

　※チェック項目７

　原稿（論文・研究ノート・実践研究論文）は、リサーチクエスションの提示，解決方法の提示，実際の実験・データの提示，分析，考察といった手順で論理的に書かれていますか？　　【　□Yes　□No　】

（６）以下を簡単に説明して下さい。本文に記載されている文章を活用して記入されることを推奨します。

　（ａ） 論文・研究ノートの場合　（100～300字程度）

|  |  |
| --- | --- |
| 独創性・新規性 |  |

　※チェック項目８（論文・研究ノート）

　研究成果の新規性についてリサーチクエスションと関係づけて書いていますか？　【　□Yes　□No　】

 （ｂ）研究ノート・実践報告の場合　（100～300字程度）

|  |  |
| --- | --- |
| 将来的発展性 |  |

　※チェック項目９（研究ノート・実践報告）

教育効果が一事例にとどまらず、どのように発展するか（汎用的に広がるのか）を書いていますか？

【　□Yes　□No　】

　（Ｃ）すべての原稿　（100～300字程度）

|  |  |
| --- | --- |
| 教育的寄与 |  |

（７）論文の体裁について，「原稿本体の書式・日本語表現の自己点検シート」（別紙）を確認して下さい。自己点検シートのチェック項目から著しい逸脱があった場合は、プレ査読に進みません。

　　□確認した

以上

「原稿本体の書式・日本語表現の自己点検シート」（提出不要）

2021/09/09版

１．投稿条件確認のお願い

　□原稿は、投稿可能な記事種別である。

　　👉「論壇」「展望」「解説」「随筆」等は投稿できません。

　□投稿規程で規定のページ数を確認し、超過していない。

　□原稿に著者を特定できる情報が記載されていない。

　　👉筆者を特定できる箇所には、伏せ字、黒塗り等でマスクをして下さい。

　□原稿をテンプレートに上書きして作成した。

　　👉新規に書式を設定して原稿を作成しないでください。原稿末に「以上」等の文言も不要です。

　□図表は，鮮明で、クリアに印刷可能であることを確認した。

　　👉データ上はクリアでも、本文中（左右二段組）に配置し、印刷すると図表内の文字が潰れて、読めないことがあります。その場合は、左右一段組で配置するなど、工夫して下さい。

　□英文原稿の場合は、英文校閲証明書が添付されている。

　　👉英文原稿の場合、英文校閲証明書は提出時に必須ですので、添付して下さい。

　□和文原稿で、英文要旨が必須の原稿の場合、英文校閲証明書の必要があることを理解している。

　　👉和文原稿は、英文要旨と英文校閲証明書は、どちらも後日提出が可能です。

　□日本語・英語のキーワード（３～５語）をシステムに入力した。

　　👉英語キーワードの入力忘れがしばしばありますので、ご注意下さい。

　□主題は主題として、副題は副題として、個別に入力している。

　　👉副題を主題にまとめて入力していることがあるので、ご確認下さい。

　□日本語・英語のタイトルをシステムに入力した。

　　👉英文タイトルが抜けていることがあるので、ご注意下さい。

２．テンプレート書式確認のお願い

　□章，節，項の付番と書式は適切である。

　　👉番号が、昇順で、番号飛びがないことを確認下さい。

　□図表の番号は、昇順で、番号飛びがない。

　□テンプレートにおける図表の定義を確認し、正しく使い分けている。

　　👉「表」は文字・数字・罫線で構成されたもので，数値自身が説明的な意味を持つものである（例：収支報告，成績表など）。ただし、数値がなく，文字情報だけであっても，罫線で区切ってあれば表である（例：時間割，旅程など）。一方，「図」は，表以外のもので，物の形状などが描写され，それが説明的な意味を持つものである（例：グラフやフローチャート、写真など）。

　□表番号と表題は表の上、図番号と図題は図の下に置かれている。

　□図表には本文に言及箇所がある

　　👉図表だけが置かれて，本文中に言及がない等がないか、確認下さい。

　□本文中での共著文献の引用は、以下の通りとしている。

　　👉共著者が2名の場合は，寺田・長尾 (2013)や（寺田・長尾, 2013）のように，2名の筆者を全ての引用箇所に書く（英文の場合：Nozaki & Ogawa (2013)や(Nozaki & Ogawa, 2013)）。共著者が3名以上の場合は，中園他 (2019)や（中園他, 2019）のように「他」を使用し，第一筆者名を書く（英文の場合：Wayne et al. (2015) や (Wayne et al., 2015)）。

　□文献リストは、「引用資料」と表記されている。

　　👉「参考文献」「引用文献」等と書かれていないか、確認下さい。

　□文献リストはアルファベット順で配列されている。

　　👉五十音順で配列されているケースがありますので、確認下さい。

　□本文中の引用と文献リストは、すべて過不足なく対応している。

　　👉文献リストにはあるが、本文中の言及がない場合がありますので、ご確認下さい。

　□文献リストの副題は、コロン（：）で区切って表記している。

　　👉副題はハイフン（－）や丸括弧で囲みませんので、ご確認下さい。

　□文献リストの書式は、テンプレート通りである。

　　👉論文名をカギ括弧「」、書名を二重カギ括弧『』、巻数号数を＊巻＊号とはしませんので、ご確認下さい。

　□文献リストの共著者名は、全員の名前を記載している。

　　👉「山田太郎他(2006).」のように省略せず、20名以下であれば、全員の名前を書いて下さい。

　□文献リストの筆者名、発表年、巻数、書名等に間違いがない。

　　👉発表年間違い、巻数間違い、筆者名間違い、共著者書き忘れ、雑誌名間違い等がしばしばあります。

　□ウエブ引用の場合は、閲覧日を書いている。

３．日本語表現確認のお願い

　□誤字・脱字、スペルミスがないことを確認した。

　 【例】×皮革　　→　○比較

　　 　　×感想を述べていたい　　→　○感想を述べていきたい

　□本文の記述で、１文が何行にもわたって続くことがないことを確認した。

　　👉次のように複数の文をつなげた１文が何行にもわたって続くことがあります。読者のリーダビリティの観点から、単文に分ける等の配慮をお願いします

 　【例】これこれこういうことがあるが、これこれこういう理由によるとも考えられ、次に考えるべき事は、これこれこういうことであるので、こういう観点で考えてみると、・・・・・・・・・・・・。

　□本文の記述では、改行を適切に行なっている。

　　👉改行なしで文章が延々と続いているケースがあります。読者のリーダビリティの観点から、改行したり、節に分けたりする等の配慮をお願いします。

　□本文の記述で、体言止めがないことを確認した。

　　👉どうしても必要な場合を除き、次のような体言止めは避けてください。

　 【例】これこれこういう程度。　→　これこれこういう程度である。

　□本文中での箇条書きの使用は、必要最小限である。

　　👉どうしても必要な場合を除き、箇条書きではなく、文章で説明して下さい。

　□本文の記述で、筆者独自の記号を使っていないことを確認した。

　　👉どうしても必要な場合を除き、次のような筆者独自の記号は使わないで下さい。

　 【例】これこれこういうことである。※ちなみに、こういう事例もある。次に、考えるべき事は・・・

　□文章は意味が明瞭で、理解困難な日本語表現がないことを確認した。

　　👉理解困難な日本語表現の例

　 【例】英語が苦手な学生の目標を明確化し、グローバルな感覚を持って行動させるには、英文に触れさせる必要性を説明する。

以上